

3. 瀰漫性肝疾患への^{99m}Tc-phytateの応用と¹⁹⁸Au colloid等とのI.D.S.による比較

川崎市立病院 理学診療部 片山 通夫
 同 R I室
 長谷川 武 浅野 宏
 伊勢原協同病院 内科 小林 忠
 同 R I室 香川 則夫

〔目的〕G.Subramanian, J.G.Mcafee 等により開発されたところのTc-phytateは、イノシトールに磷酸が付いたもので血中のCaやMgと結合して、体内にてcolloid状となり肝の網内系に集まるといわれている。我々はそのTc-phytateを、瀰漫性肝疾患に用い、さきに発表せる¹⁹⁸Au colloidによるものとを、I.D.S. (Iso Dose Scintigram) によって比較し、瀰漫性肝疾患の判別に非常に有効であったので報告する。

〔方法〕^{99m}Tc-phytateを体重1kg当り50μCiを静注し、¹⁹⁸Au-colloidは体重1kg当り8μCiを静注し、30分後にScinti Cameraにて撮影した。Scinti Cameraは東芝102型に1,000holes Diversing collimatorを付け、等倍 life size photo Scintigramとしたものと、202型に30,000holes collimatorを付けて等倍 life size photo Scintigramとしたものとを、補正フィルターを用いた小西六I10型 Dencito materにてI.D.S. (Iso Dose Scintigram) を作り、^{99m}Tc-phytateのものと、¹⁹⁸Au colloidのものとを比較した。比較した項目は、①肝の大きさ②肝の形状③R Iの分布状態④脾の現出状態⑤骨髄の現出状態⑥骨の現出状態と、血中の⑦G.O.T. ⑧G.P.T. ⑨C.L.D.H. ⑩Al-P ⑪γ-グロブリン値⑫モイレ等とを、比較検討した。

〔結果〕^{99m}Tc-phytateによる瀰漫性肝疾患の肝Scintigramは腎の現出することを除けば、^{99m}Tc-S-colloid, ^{99m}Tc-Autolabelled-Sn-colloid, ^{113m}In-colloid等に比較して、¹⁹⁸Au-colloidのものと最もよく似た像を描出するので、Scinti Cameraによる瀰漫性肝疾患の診断上、非常に有効なものとする。

4. びまん性肝疾患の診断への^{99m}Tc-Su-phytateの有用性

岐阜大学 放射線科
 今枝 孟義 仙田 宏平 福富 義也
 石口 修三

〔目的〕従来我々は¹⁹⁸Auコロイド肝シンチによるびまん性肝疾患の診断、経過観察及び予後判定、につき報告してきた。しかし¹⁹⁸Auコロイドは肝の被曝線量が非常に高く、更にKupffer cellから排泄されにくい欠点がある。

今回^{99m}Tc-phytateにより検討したところかなりよい臨床的結果を得たので報告する。

〔方法〕^{99m}Tc-Sn-phytateの7~15mCiを静注して20~30分後——血中クリアランスを求めたところ閾値は¹⁹⁸Auコロイドよりも低い——からNuclear Chicago製シンチカメラHPを用いた左右の正面、側面および後面の6面シンチをpreset timeで呼吸停止下にて施行した。対象とした症例は日常最もよく遭遇する急性肝炎、慢性肝炎、肝硬変症である。

〔結果〕1. ¹⁹⁸Auコロイドで脾の描出のはっきりしない慢性肝炎、肝硬変症で^{99m}Tc-Sn-phytateは、^{99m}Tc S colloidほどではないが鮮明に脾を描出し診断を可能とした。2. 肝硬変症で¹⁹⁸Auコロイドによって肝の描出が非常に悪くその大きさのはっきりしない場合、^{99m}Tc-Sn-phytateは肝の内部構造がわかる程によく肝を描出した。3. 慢性肝炎、肝硬変症で時々認められる右葉の後方へのおちこみのためにpseudotumorを呈する症例において多面シンチにより鑑別診断がより容易であった。4. 経過観察による肝シンチ上の変化の有無についてはまだ充分なる期間の症例がなく検討中である。5. なお、血中Caの高低による^{99m}Tc-Sn-phytateの取り込み上の変化については、あまりはっきりとした有意差を認めなかった。6. 肝対脾の摂取率、脾の大きさを正確に描出するなどによって^{99m}Tc-Sn-phytateによるびまん性肝疾患の診断が行え得ると思われる。